

「サプライズ」

—初稿—

2023/5/29

米俵

〈人物表〉

岩上 武 (40) 中小企業のサラリーマン、営業
藤川 千賀子 (45) 編集者

〈ログライン〉

武は、千賀子にプロポーズするが、失敗して別れる話。

〈ねらい〉

- ・サプライズって自己満
- ・マザコン男
- ・女の切り替えの早さ

1. 千賀子のマンション・リビング（夜）

真っ暗な部屋。岩上武（40）、暗視ゴーグルを装着し、鼻歌交じりで、ダイニングテーブルに食事の準備をする。最後にワイングラスを並べて、自分に酔ったように、

武 「あー、完璧だ」

× × ×

玄関から鍵を開ける音。

藤川千賀子（45）、部屋に入り電気のスイッチをつける。45才には見えない容姿をしている。（20代後半くらい）

武、電気がつくと同時にクラッカーを鳴らして、

武 「特徴的な言い方）サプライズ」

千賀子、静かに驚く。怪訝な顔で、

千賀子 「武、またなの？ 警察呼ぶよ」

武 「おいおい、彼氏に向かってそれはないだろ」

千賀子 「この前、武とは別れ話したよね……家の鍵、何本持っているの？」

武、満面の笑顔で、

武 「千賀子、あんなのは痴話喧嘩だろ。別れ話に含まれないよ」

千賀子、大きな溜息をつく。

ダイニングテーブルには、綺麗に並べられた料理。

武、ダイニングテーブルに誘導しながら、

武 「ほら、こんなに美味しそうな料理だよ。千賀子も疲れただろ。喧嘩するのはやめよう」

千賀子、嫌そうに席につく。

武、台所からワインを持ってきて、グラスに注ぐ。

武 「千賀子の一番好きなワインを用意したんだ。今日は特別な日だから」

千賀子、注がれたワインを一気に飲んで、

千賀子 「特別な日？ どうでもいいから早く帰って欲しいんだけど……」

武、少し笑って、

武 「千賀子はせっかちな。乾杯ぐらいしようよ」

武、千賀子のグラスに再びワインを注ぐ。

武 「はい、乾杯」

武、料理を取り分けるが千賀子は料理に手をつけない。武、それを見て微笑む。

武 「これで千賀子の機嫌も良くなるかな」

そう言っ、ポケットから小さな箱を取り出す。

千賀子の前に出し、箱を開けながら、

武 「サプライズ」

箱の中には大きなダイヤのついた指輪。

武 「千賀子、結婚しよう」

千賀子、驚いた顔で、

千賀子 「え？」

武 「機嫌直った？ つけてみようか」

武、指輪を取り出し、千賀子の手を取ろうとする。

千賀子、そのまま指輪を受け取り、箱に戻す。箱を

武に渡して、

千賀子 「いらぬ。結婚しない」

武 「え？ どうしたんだい。いつもの君じゃないね」

千賀子 「いつものって？」

武 「いつもなら、ありがとうって笑顔でプレゼントを受け

取ってるだろ？」

千賀子 「ここでOKを出すのが、いつもの私？」

武 「僕の計画ではね。それにこの前のは、別れ話じゃなくて

痴話喧嘩だ」

千賀子 「そういうところ……本当に嫌。僕の計画、僕の計画って

それしか頭にないでしょ」

千賀子、大きな溜息をついて、乱暴に料理を食べる。

そのまま、強い口調で、

千賀子 「あなたにどういったら伝わるの！」

武、怒鳴って、

武 「口に物を入れて喋るな！」

一息吐き出してから、落ち着いた声で、

武 「すまない。怒鳴ってしまったね。千賀子、口に物を入れ

て喋るのは行儀が悪いよ」

武、千賀子の口元を拭こうとする。

千賀子、武の手をよけて、口に大量に料理を詰める。強めの口調で、

千賀子「あなたの嫌われることをすれば、別れてくれる？」

口の中の物が武の方へ飛ぶ。武、グツとこらえて、

武「僕はママにもう話したんだよ。最高の女性だって」

千賀子、笑って、

千賀子「そりや大変。ママに訂正しないと！」

再度、口の中のものが飛ぶ。

武「だから、口に物を入れて喋るなって！」

千賀子、武を睨みつける。

武「どうしたんだよ、今日の君はおかしい」

千賀子「おかしいのはあなたでしょ。武が好きだったのは、僕の計画に合わせてる私」

武「そんなことはない。君は僕の計画通り、完璧な女性だ」

千賀子「計画通り？ 完璧な女性？ 笑える。私、45才だよ」

武「え？」

千賀子、バッグの中から、運転免許証を取り出し見せる。

千賀子「(武の真似をして) サプライズ」

千賀子、馬鹿にしたような口調で、

千賀子「武くんより5才年上ですよー」

千賀子、大笑いする。

武、免許証を握りながら、大声で叫ぶ。

武「人工物ってことかー！ー！ー」

千賀子「年齢ぐらいはママに言う前に調査しないと」

武「18も……くそババアじゃねえか！」

武、免許証を床に叩きつける。

千賀子、笑って、

千賀子「武が言う僕の計画は穴だらけってこと。やっと別れる気になった？」

武「僕は騙された。僕は騙されたんだ……」

千賀子、溜息をつく。

千賀子「もう騙されたってことでいいから。早く出ていってこない？」

武「こんなはずじゃないんだ、こんなはずじゃ……ママが言ったんだ。僕の計画は完璧だって……」

ブツブツと繰り返す。

武、狂ったように首を振りながら、

武「ママ、ママ、ママ（繰り返す）」

千賀子、武の様子を見て、ゆっくり距離を取る。

武、ロボットのような話し方で、

武「人工物ババアは計画外なので排除します」

近くにあったナイフを握り、千賀子に襲いかかる。

千賀子、素人ではない動き。クッションを使い対処する。飛んでいくナイフ。

武、別のナイフを握る。千賀子、武から距離を取る。ソファアを挟んで睨み合う2人。ぐるぐるとそのまま回りながら、

千賀子「ねえ、これは武のいう計画の一部？」

武「そんなわけないだろう。計画外だ」

千賀子「計画外のことほしない方がいいんじゃない？」

武「君がそうさせたんだろう！」

武、素早く動く。千賀子、それを制するように、

千賀子「落ち着いて。私のいうことを聞いて」

武「嫌だ。君のサプライズは全然ダメだ」

千賀子「サプライズじゃない。今、武がしようとしてること」

武「君を刺したい」

千賀子「そう。それは感情に任せた行為でしょ」

武「そうだ。今、僕は初めてのことをしている」

千賀子、少し考えて、

千賀子「初めてかは分からないけど……大変なことをしようとしてる」

武「うるさい！」

千賀子「いい？ 武が私を傷つけたとして……一番傷つくのは誰？」

武「……」

千賀子「私？」

武「……」

武、勢いがなくなる。

千賀子「そう、違うよね」

武「ママ……」

千賀子「そうだよ、大切なママを傷つけていいの？」

武「ママ……」

武、ダイニングテーブルにゆっくりとナイフを置く。
うなだれて、

武「ママ……ごめんなさい」

千賀子「うん、そうだね。今から武がしなくてはいけないことは

何？」

武「ママに謝らないと……」

千賀子「そうだよ。私が完璧でなかったことも伝えないとね」

武「騙されたって、ママに言わなきゃ」

千賀子、武の荷物を渡しながら、

千賀子「そうだね。とんでもない女だったってね」

武、頷く。

千賀子、玄関の方へ促す。

2.

千賀子のマンション・玄関（夜）

武、靴を履きながら、

武「千賀子、僕は君になんてことをしようとしてたんだ」

千賀子「本当、大変なことだよ。捕まるよ」

武、千賀子の方を向いて、

武「ごめん。許してくれるかい？」

千賀子「今回は許すけど、二度と来ないでね。次来たら通報するよ」

武「大丈夫。二度と来ないよ……」

武、鍵を千賀子に渡す。

千賀子「もうない？」

武、頷く。

千賀子、笑顔で手を振りながら、

千賀子「バイバイ」

武、背中を丸めて出ていく。

千賀子、鍵を閉める。

武の歩いていく音が聞こえる。

千賀子「はあ……しんど」

携帯を取り出して、電話をかける。

千賀子「あ、今暇？ 一人じゃ食べきれない量のご馳走があるんだけど、今から来る？」

(おわり)